硫黄島を去る７月５日に訪問する機会を得た。

小笠原諸島本土復帰４０周年記念行事の帰路、自衛隊機で訪問をした。かねてから一度訪問したいと切望していたことが遂に実現した。

なぜにそれほどまでに切望していたのかといえば、そこは前の戦争で２万人以上の日本兵が玉砕をしたと言われる激戦地であり、しかも其の遺骨の多くがいまだに収集されないと言うことで、なんとしてもそこに行き、英霊たちに哀悼の意を捧げたいと考えていたのである。

硫黄島に着いた其の日は、大変に暑い日であった。我々は、まず最初に硫黄島で亡くなった方々を弔うために作られた碑に、献花し、そして其の碑の上から水をかけた。硫黄島の戦いに参加した日本兵は、一滴の水を飲むことすら出来ずに口の渇きに耐えながら死んでいったと言われる。また当時、小さな池があったところに、少なくない日本兵が耐え切れずに水を飲みに言って、待ち構えていた米兵によって撃ち殺されたと言われる。そんな水に対する文字通り渇望を少しでも癒さんとして、我々は碑に、水を掛けるのである。

それから島を一周回った。暑い硫黄島は、まさに殺風景な景色であった。この島のいったいどこに隠れて圧倒的火力を持つ米軍に対抗できるのであろうか。そして、兵隊が、立てこもった洞窟を見た。栗林中将の司令部は夏と言うこともあって雑草に覆われていた。私は其の入り口に懐中電灯でしばし入った。まさに体一つやっと折り曲げては入れるくらいの小さな穴である。予定の時間が少なく入り口より奥に入ることは出来なかったが、当時の日本兵が其の中で、酸素も十分に入らないような中で多数うごめきながら、戦ったことを考えると、あまりの切なさに心が揺さぶられ、平和な時代に安穏と暮らしていることに後ろめたささえ感じられた。

米軍の上陸時に最も激しい戦闘の行われたすり鉢山は、もともとすり鉢の形をしていたのでそう呼称されていたようであるが、米軍のすさまじい艦砲射撃で其のすり鉢の半分が、崩されている。

そこに大きな大砲があったが、それは人力でそこまで持って上がられたものという。暑い中どれほどの苦労であったかと思われる。

島内を一周する間、ある塹壕の跡地に入って抜けた。ところどころに小さなくぼみがあり、おそらくそこで兵隊たちが休憩睡眠をとったところであろう。

ともかく熱い硫黄島は、こうした塹壕の中でもサウナに居るように暑いところが少なくない。こうしたところで青春の汗を流し、命を失った方々に対して、今の日本は真に報いているであろうか。

アメリカ側は其の遺骨はすべて回収をして本国に弔っているのに対して、日本側は其の半数に届くかどうかである。今の硫黄島の滑走路の下にも多くの骨が埋まっていると言う。

今のペースで遺骨収集が進むと、すべての遺骨の収集に、後３００年必要であると言う。

祖国がこれほど繁栄し、それにもかかわらずこれほどひどい仕打ちを受けると思って死んでいった若者がいるであろうか。

彼らは、自分の死が意味あるものと信じていたのではなかったか。我々は、国家的恩知らずと言われても仕方がないのではないか。

クリント・イーストウッドが、「日本人は硫黄島についてもっと知るべきだ」と映画の撮影の後語ったと言うが、まさにこのことを意味するであろう。

一方アメリカは、一介の旅行会社が硫黄島の観光旅行を企画し実施した過去を持つ。日本では、年に一回の墓参のときに一部関係者が帰れるのみであり、一般の渡航はきわめて難しい。

戦後 63 年。小笠原諸島が日本に返還されて 40 年の月日が流れたが、その中にあって硫黄島については、かつてそこで生活していた旧島民が自分の土地に帰って暮らすことをいまだ許されていない。

こうしたことを考えると矛盾はますます大きく感じられるばかりである。こうした硫黄島の状況を変えること、すなわち、いつでも当たり前に家族の墓参が出来、戦没者の遺骨収集を早急に遂行し、旧島民が帰れるようにすることこそ、戦後を終わらせることとなろう。それはけじめであり、戦後の平和を享受する私たちの使命である。そして其のことは、毅然たる日本国家誕生の必要条件であろう。